

# 現代史と歩んできた英徳紅茶

須賀 努 文・写真

## 民国時代より生産を開始

広東省広州と言えば、清朝の時代、一時对外貿易を独占するなど、貿易の一大拠点というイメージが強く、多くの茶葉がここから海外へ輸出され、中国茶の名声を高めた場所。だが広東省は茶葉貿易だけでなく、実は茶産地としても知られている。広州から150キロほど離れた英徳の紅茶は、欧州にもその名を知られた銘茶であり、しかもその発展は現代中国史とつながっており、実に興味深い。

英徳紅茶の歴史を見ると、民国時代に既に小葉種を使い、紅茶が作られていたが、本格的には1950年代に英徳農場が作られ、雲南から大葉種が、そして福建から水仙という品種が導入され、茶園が作られていく。59年の茶葉試験場（現茶葉研究所）設立、そして60年には紅茶輸出が始められ、外貨獲得の重要な物資となっていく。広東省がここに茶葉研究所を設け、そして現在もそのまま置かれていることからもこの地の重要性は十分に伝わってくる。

ただ90年代には輸出競争力が無くなり、一時は市場でも英徳の名を見掛けることは無くなっていた。そのころ、香港で英国人が「英徳の紅茶は最高だったな」と昔話のように話していたのをよく覚えている。もう英徳紅茶は飲めないので、と諦めていたが、2010年以降、広州で早茶に行くと「英紅9号」という名が見られるようになつた。省を挙げての宣伝もあり、現在は国内でも知られるブランドになりつつある。ちなみに英紅9号とは、1961年に研究所で雲南大葉種を使って開発された品種（当初の名称は英茶17号）であり、それが時を経て、中国国内向けに見事に復活している。



須賀 努（すが・つとむ）  
茶旅人、1961年東京生まれ。上海語学留学、北京、香港、台北で合計17年滞在。「茶旅」でアジア各地の茶畠、茶荘などを訪ね歩く。



红旗茶廠の高い天井



## 新中国の歴史と深い関係

実は英徳の話はこればかりではない。もう一つの興味深い歴史があることを今回知った。もともとこの地には客家が多く居住している。台灣においても、客家が移住して茶作りに従事しているケースが歴史的に多数見られることから、客家の役割も注目される。客家と茶の歴史、ぜひ別の機会に調査してみたいテーマである。

そして新中国成立後、英徳農場には57年の反右



積慶里紅茶谷で英紅を味わう

の前に「英徳華僑茶場」という文字のフラッグが見えた。これは79年の中越戦争でベトナム在住華僑が大量に帰国を余儀なくされたが、その一部はこの茶廠にやって来て、受け入れられた歴史があることを示していた。時期はちょうど改革開放初期、ベトナム帰りの労働者が茶作りで活躍したであろう情景が目に浮かぶ。そういうえば、この付近の建物、あのハノイなどでよく見られる独特的のクリーム色がよく使われており、あれと思ったが、そのような理由だったのだろう。英徳の紅茶には新中国のさまざまな歴史が詰まっていた。

さらには英徳紅茶の香りを楽しんでいると、目の前に「英徳華僑茶場」という文字のフラッグが見えた。これは79年の中越戦争でベトナム在住華僑が大量に帰国を余儀なくされたが、その一部はこの茶廠にやって来て、受け入れられた歴史があることを示していた。時期はちょうど改革開放初期、ベトナム帰りの労働者が茶作りで活躍したであろう情景が目に浮かぶ。そういうえば、この付近の建物、あのハノイなどでよく見られる独特的のクリーム色がよく使われており、あれと思ったが、そのような理由だったのだろう。英徳の紅茶には新中国のさまざまな歴史が詰まっていた。

## 宇宙帰りの種子が成長中

一方で新しい英徳を見ることもできた。神舟

11号が英紅9号の種子も載せて宇宙に旅立つのは今年のこと。持ち帰られた種子のうち、4つが発芽し、育っているという。普通の葉と比べて、丸い形になつていていたのはやはり宇宙の影響だろうか。この茶葉で作られた新・英紅9号の紅茶をぜひ飲んでみたいと思ったが、その日は来るだろうか。

また積慶里紅茶谷という、郊外の風光明媚な茶園にも案内された。大自然の中にきれいに茶樹が植えられている。小雨が降っていたが、その光景の中で極上の紅茶を入れてみると、かえつて優美に見える。近くに温泉などリゾート施設もあるようで、広東省という立地を考えれば、これから人